

脱植民地化後の台湾における言語政策 「国語」を軸とした「中国化」の展開を中心として

森田 健嗣

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 博士課程

緒 言

現代台湾では中国語が「国語」とされているが、台湾語、客家語、先住民諸語、日本語などが用いられる多言語社会である。この多言語社会の台湾では、近年統合理念としての力を失った国民党一党支配時期の公定中国ナショナリズムに代わり、多文化主義的な統合理念の「定着の歴史が異なる台湾社会の諸文化集団（族群）の文化は価値において平等であり、国家も族群相互間でもこの文化多元性を尊重しなければならない」とする考え方が登場している。これまでのところ、民主化期に擡頭した台湾ナショナリズムの一部の論調が期待するような、「台湾文化」によるこれまでの国民統合の結果の置き換えという新たな文化覇権の確立はなされず、多文化主義的国民統合政策により、かつての国民党政権の公定中国ナショナリズムの覇権下での、不平等と行き過ぎた一元化が是正されただけのようであるとされる。その台湾の多文化主義的な文化政策の顕著な表現の一例が、1990年代以降小学校における母語教育などの多文化主義的言語教育政策であろう。

この多文化を容認する社会への移行前、すなわち脱植民地化後の台湾は国民党政権による厳しい統制が長く続き、それは言語文化面においても強力に実施された。その結果、日本統治時代に普及された「国語」（日本語）が排除され、台湾地元の言語である「台湾語」でさえも排除された。その上で国民党一党支配の時代に「国語」（中国語）に代表される公定中国ナショナリズムを持ちこんだ圧倒的な少数派の外省人（1945年以後中国大陸から台湾に移り住んだ人）が提示する言語文化に、大多数の本省人（1945年以前から台湾に住む人）という公定中国ナショナリズムとは無関係の集団が、同化させられる「中国化」政策が進められた。もしこの「中国化」が順調に進行したのであれば、「郷土言語教育」に代表される多文化社会への移行という動きは起きないはずである。では、その「中国化」とは何か。そして、この動

きが生じた契機はいかなるものか。こうした問いを明らかにするのが、本研究の目的であった。

考 察

脱植民地化後の台湾では、「国語」（中国語）という近代中国の産物が持ち込まれることになったが、台湾においてはこれまた近代日本の産物である「国語」（日本語）がすでに十分普及されており、台湾に存在した台湾語などの言語さえも消失するかののごとの状況に至っていた。だが脱植民地化直後、ただちに言語文化面において台湾を完全に「近代中国」の一部にすることは不可能であり、台湾語が混用されるといった模索の状態であった。

国共内戦に敗れた国民党中央が台湾へ移転した1950年代からは、それまでの状況から一変したものであった。国民党政権の提示する一大「中国化」の展開により台湾を近代中国国家へと急速に進展させ、義務教育を通じて台湾に存在した台湾語などの言語は抑圧されることとなった。だが、非学齢期成人向けに行われていた「国語」補習教育は順調に進まない側面があり、戦後台湾において日本統治時代生まれの元「日本人」を「国語」を理解する近代中国国家の「中国人」へと仕立て上げることは結果として重視されず、中国大陸で未完のまま終わった大衆への「国語」普及は、台湾においても未完で不完全な形で進められていた。よって一面において学校では言語一元主義が達成されたかのようにみえるが、1950年代以後においても脱植民地化直後の時期と同様、台湾社会全体においては十分な「国語」普及はなされていなかった。そのことは当時の台湾で多数を占めた日本統治時代生まれの者が、日常生活において台湾語ラジオや台湾語映画に娯楽を求めていた。また台湾民衆の掌握のため外省人による台湾語学習さえも行われ、脱植民地化後の台湾社会全体において「中国化」を推進しようとしても、その実現は困難であった。

以上は台湾の主に漢族が居住する平野部における「中

国化」について検討したものである。では先住民が居住する山地での状況はいかなるものだったのか。脱植民地化後の台湾に到来した統治者の国民党政権は、来台後すぐの時点から山地に住む先住民を「劣った」人々であると認識していた。その新たな統治者による山地行政や教育に対し先住民エリートらは異議を申し立てた。だが1949年末に台湾へ移転した中央政府は、山地住民を純粋素朴で共産党の思想に引きずり込まれるという疑いの目を持っていた。政治に関する「恐怖」が生じて先住民は独自の文化を語ることを抑圧され、さらに国民党政権は先住民エリートを封じ込めた。このことは山地での施策に対して下からの意見の代弁者を失うことであり、上から進められる「国語教育」などに対し先住民らが意見を述べる空間を失ったことをも意味した。これらのことから、山地において先住民が有する言語文化を消失させる一因になっていた。

さて、脱植民地化後の台湾において上からの「中国化」が展開されたものの、やはり台湾語などが存在し続けるという言語環境であった。1970年代に台湾の国際環境における地位の低下がもたらされると、台湾内部、すなわち台湾の人々の声を無視できない状況となっていた。具体的には、テレビにおける「方言」論争においては、行政院長の蔣経国は農村で主に用いられる言語が台湾語であることに鑑み、政令伝達のため道具的に台湾語を利用した。また事実上唯一の政党である国民党の外で、民主化を求めて行動する人々が集結した「党外人士助選団」による主張の「十二大政治建設」においても、台湾人の言語権を求める主張が展開された。また国民党政権の正統性を保持するための「増加定員選挙」がなされるごとに、「方言」の存在もクローズアップされていった。台湾基督教長老教会においては1970年代からの国際環境の変化に対し、台湾人自身が国家の命運を定めるべきだとの言論を繰り返し、その結果教会ローマ字聖書は没収された。しかし教会側は、「没収は中華民国憲法にある信仰の自由に反する」などの論理で反撥姿勢を示し、教会ローマ字や台湾語による宣教を守り、統治者からの圧迫を失わせた。こうしたことから統治者側は台湾に存在するエスニック・グループの言語を、重視とまでは言えないものの少なくとも黙認せざるをえなくなっていた。

結 論

台湾における脱植民地化の過程は台湾人の主導で行わ

れたのではなく、新たに統治権を取った国民政府によって着手された。すなわち、支配側(宗主国=日本)と被支配側(植民地=台湾)はともに不在であった。この「代行」は戦後すぐからのものではなかった。もし、新たな統治者(国民政府)が友好的に台湾を接収していれば被支配者(台湾人)との間に摩擦は起こらなかった。ところが「二二八事件」(1947年)により国民統合が失敗してしまった。「代行」はその国民統合の破たん後に始まったものである。そして「代行」したことが一種の「植民地性」を持たせてしまい、脱植民地化後の台湾において、例えば朝鮮半島に見られるような脱植民地化と言語ナショナリズムが平行して進められることはなく、台湾人が主体的ではなく受動的に上から新たな近代中国の産物である「国語」を注入させられたのであった。

しかし1970年代は台湾の国際的地位の低下により、統治者は台湾内部のエスニックグループの声を聞かざるを得なくなり、そのことが今日の台湾にみられる多言語主義への萌芽へと結びついていく。

以上から、台湾における多文化・多言語社会への移行の要因として次の点を提示した。アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』(岩波書店、2000年)は、ある単位の中に強固な下位集団をほとんど持たない場合においてナショナリズムが安定して存立することなどを挙げている。脱植民地化後の台湾において「国語」に代表される公定中国ナショナリズムの担い手は外省人という圧倒的少数派であり、台湾には本省人という公定中国ナショナリズムとは無関係の強固な集団が存在した。たしかに「国語普及政策」は、普及そのものは学校教育を通じて成功したものの、その成功は本省人の私空間全体を覆うものではなかった。こうした構造により「言語一元主義の限界」をもたらした多文化・多言語社会へ移行した、というのが本研究での結論である。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、財団法人三島海雲記念財団の学術研究奨励金をたまわり、有意義な研究環境をご提供いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

主要参考文献

- 1) アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』(岩波書店、2000年)。
- 2) 浦山聖子「多文化主義の理論と制度: Will Kymlicka の多文化主義論と公用語政策の検討」『国家学会雑誌』120巻3・4号(財団法人国家学会事務所、2007年)
- 3) 何義麟『二・二八事件—「台湾人」形成のエスノポリティクス』(東

京大学出版会、2003年)

- 4) 北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』(北海道大学出版会, 2008年)
- 5) 菅野敦志「台湾における文化政策と国民統合(1945～1987)－「脱日本化」・「中国化」・「本土化」をめぐる史的考察－」(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科、2006年度学位(博士)請求論文)
- 6) 陳培豊『「同化」の同床異夢 日本統治下台湾の国語教育史再考』(三元社、2001年)
- 7) 村田雄二郎「「文白」の彼方に－近代中国における国語問題－」『思想』No. 853(岩波書店、1995年)
- 8) 林初梅『「郷土」としての台湾－郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容－』(東信堂、2009年)
- 9) 若林正丈『台湾の政治 中華民国台湾化の政治史』(東京大学出版会、2008年)
- 10) Wang Fuchang, *Unexpected Resurgence : Ethnic Assimilation and Competition in Taiwan, 1945-1988* (Ph.D. diss., Dept. of Sociology, Univ. of Arizona, 1989)
- 11) Wilson, Richard W., *Learning to be Chinese : the political socialization of children in Taiwan* M.I.T. Press, 1970